

ストップザ安倍の闘いは三つの共闘

1 アジアの民衆との共闘

中国共産党政権の南シナ海における派勢力拡張は、日中共同声明第7項「日中両国間の国交正常化は第三国に対するものではない。両国のいずれもアジア太平洋地域で覇権を求めべきでなく、このような覇権を確立しようとする他のいかなる国、あるいは国の集団による試みにも反対する」と述べる反覇権条項違反である。国際海洋法条約に基づく仲裁裁判所の判決を「紙屑」と言い放つ中国政府の態度は、「満州事変」でのリットン調査団報告書を一蹴したかつての日本の姿と重なって来さえする。

1980年代末にあったように もし、中国の民衆が、この覇権主義に反対し、天安門で大集会をもったら、私たちは、中国の政権は信頼しないが、中国の民衆を信頼するであろう。

これを逆から見たら、安倍政権の軍事的膨張政策にアジアの民衆は反発しながらも、私たちがこの安倍政権に抗議の声を挙げていることによって、私達に対する信頼が生まれる。私たちの活動が中国などアジアの民衆に勇気を与える。私たちは、かつて、韓国の民主化運動から大きな勇気をもたらしたことを思い起こすべきである。安全保障の要諦は抑止力にあるのではなく、安心供与、すなわち、隣国から見て信頼に値する国か否かである。我われの「ストップザ安倍」の闘いは「日本の平和資源」であり、アジアの民衆との共闘でもある。

2 死者たちとの共闘

「命は確かに大切である。しかし、時にはそれをなげうっても守らなければならない価値があるということ考えたことがあるだろうか」（安倍晋三『美しい国』2006年文春新書、後に『新しい国』と改題）70余年前、私たちは、政治家にこのような言葉を吐かせないと誓い、「政府の行為によって、再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し」（憲法前文）、戦後の再出発を為した。この誓いの背後には、アジアで2000万人以上、日本で310万人の非業、無念の死を強いられた人々がいた。戦後の否定を声高に語る安倍政権との闘いは、非業、無念の死を強いられた死者たちとの共闘でもある。共闘する死者たちは、非業無念の死を強いられた死者たちだけではない。戦後の平和運動を担った、今は亡き先人たちとの共闘でもあることを忘れてはならない。

3 未来との共闘

戦後70年、いろいろ批判はあったが、とにもかくにも、日本は戦争をしないできた。「戦争しない国」、この「平和資源」を子供、孫ら未来に引き継がなければならない。日本を「戦争のできる国」にしようとする安倍政権にストップを掛ける、それは未来との共闘でもある。

2016年8月15日

戦争をさせない1000人委員会事務局長 内田 雅敏